

岩絵の具

「岩絵の具」とは、日本画につかわれる絵の具です。色をもつさまざまな鉱物などを砕いた粉末です。岩絵具は、水などには溶けず、紙や布を染めることはできないので、ニカフと呼ばれる動物由来の天然の接着剤に混ぜて描きます。画材や着色につかわれる色材のうち、岩絵の具のように水などには溶けないものは「顔料」と呼ばれます。水などに溶けるものは「染料」といいます。

展示では、岩絵の具の原料となる鉱物などの標本と、それらからつくられた、粒径の異なる2種類(約 $14\mu\text{m}$ $56\mu\text{m}$)の粉末をならべています。どれも、鉱物標本よりも色が白っぽく見えます。たとえば左上の黒曜石を見ると、鉱物自体は真っ黒なのに、その粉末はねずみ色です。これは、透明な氷が、かき氷になると白っぽく見えるのと、同じことがおこっています。細かな粒の表面で、光がその波長(=光の色)によらず、さまざまな向きに多く反射するようになり、白く見えるのです。

現代の岩絵具は、約 $5\text{--}170\mu\text{m}$ の粒径を10段階に分けて使用されます。鉱物を原料とする顔料は世界中で見られますが、異なる粒径の繊細な色の違いを使い分けるのは、岩絵の具を用いる日本画独自の手法だそうです。

参考文献

・「岩絵具の化学—粒状顔料が織りなす美」、上田邦介，化学と教育，61,408(2013)。

上羽 貴大(科学館学芸員)



展示場3階 岩絵の具の展示

学芸員の
展示場ガイド

「学芸員の展示場ガイド」では、サイエンスガイドの方といろんな展示を動画で紹介しています。ホームページからアクセスできますので、ぜひご覧ください！